

カバー画 西村ツチカ

DIE ROTEN MATROSEN ODER EIN VERGESSENER WINTER

by Klaus Kordon

Copyright © 1984, 1998 by Beltz & Gelberg
in the publishing group Beltz, Weinheim, Basel.

This Japanese edition published 2020
by Iwanami Shoten, Publishers, Tokyo
by arrangement with
the Publishing Group Beltz, Weinheim, Basel
through Meike Marx Literary Agency, Hokkaido.

目 次

第二部 友と敵(続き)	13
第三部 怒り	133
第四部 どんなに遠い未来でも	
331	

原注	
訳注	383 382
あとがき	385

訳者あとがき	393
--------	-----

『ベルリン1919』にまつわるドイツ年表	
----------------------	--

397

上巻目次

第一部 不穏な空氣	
第二部 友と敵	

▼本文中の(ー)は原注を、*ーは訳注を示す

ベルリン市街

0 1km

黒線内の拡大地図は次の見開きを参照

シェーンハウスマ通り

ブルンネ通り

ローゼンタ

ル通り

ダンツィヒ通り

フリードリヒスハイン公園

アレクサンダー広場・

・王宮

ツーリヒ通り







主な登場人物

ヘレ(ヘルムート・ゲーブハルト)	この物語の主人公。十三歳
ルディ	ヘレの父さん。第一次世界大戦に従軍し右腕をなくす
マリー	ヘレの母さん
マルタ	ヘレの妹
ハンス(ぼうや)	ヘレの弟
エルヴィン	二年前にインフルエンザで死亡したヘレの弟
オスヴァイン	掘つ立て小屋に住む手回しオルガン弾き。父さんのトランプ仲間
シュルテ(ばあさん)	屋根裏部屋に住みスリッパの内職をつづけるおばあさん
ナウケ(エルンスト・ヒルデブラント)	シェルテ(ばあさん)に間借りする男。スバルタクス団員
トルーテ	AEG社で働くナウケの恋人。スバルタクス団員
モーリッツ・クラーマー(おじさん)	父さんの元同僚で親友。スバルタクス団員
アツツエ	ヘレのアパートのとなりに住む若い労働者。スバルタクス団員
エテ(エーリヒ・ハンシュタイン)	落第してクラスメイトになつたヘレの友人
アウグスト・ハンシュタイン	エデの父親。新聞『赤旗』に記事を書く
ロッテ	エデの妹。労咳にかかる
アディ	エデの弟

ハイナー(ハイインリヒ・シェンク) 黒髪の水兵
アルノ・シュリヒト 赤毛の大男の水兵
フリツツ(フリーードリヒ・マルクグラーーフ) 水兵にあこがれる、ギムナジウムに通うヘレの友だち
アンニ(アンネマリー・フィーリツツ) 結核を病んだ十四歳の少女。半地下に住む
アンニの母親 夜の酒場で給仕をしている
フィーリツツ アンニの父親。二年前に戦死
ヴィリー、オットー アンニの弟たち
ギュンター・ブレーム ヘレの級友
のっぽのハインツ ヘレの級友
フランツ・クラウゼ ヘレの級友
ペーター・ボンメル ヘレの級友
フレヒジヒ先生 生徒から慕われている教師
フェルスター先生 元兵士で横暴な皇帝派の教師
ガトフスキー先生 温和な女の教師
ノイマイヤー校長 フェルスターに近い校長
ちびのルツ ヘレとおなじアパートに住む少年。食べ物をねだるお調子者
レレ ナウケのあとに入ったシユルテばあさんの間借り人
フレーリヒ先生 貧民街で診療所を営む医師
パウル・クルーゼ 父さんの元戦友

『ベルリン1919』に登場する政党・団体関連図

ドイツ帝国 1871–1918

1918年の十一月革命によって打倒される

皇帝 ヴィルヘルム2世

支持者……フェルスター先生, フリッツの父親

前史 1875年, ドイツ社会主義労働者党創設

1877年, ドイツ社会主義労働者党, 帝国議会の総選挙で議席を獲得

1890年, ドイツ社会民主党に改名

ドイツ社会民主党 (SPD)

第一次世界大戦(1914–18)終了間際に政権参加

政治家……エーベルト, シャイデマン, ノスケ

支持者……オスヴィン

機関紙『前進』

党の戦争支持をめぐって反対, 分裂

→ ドイツ独立社会民主党 (USPD)

政治家……ハーゼ, エミール・アイヒホルン

支持者……フレヒジヒ先生

戦争に反対した党内の急進派によって結成

→ スパルタクス団 (のちのドイツ共産党)

指導者……リープクネヒト, ローザ・ルクセンブルク

支持者……ナウケ, トルーデ, クラーマーおじさん, アッツェ, ルディ, ハイナー, アルノ(赤い水兵たち)

十一月革命後の体制をめぐって対立

ベルリン 1919 赤い水兵 下

第二部

友と敵
(続
き)

いけすかない奴

氷の結晶けっしゆうができた窓ガラスの向こうがようやく明るくなってきた。ヘレはもう眠くなかったが、マルタのほうにころがつた。なんで早く起きなくちゃいけない？　日曜日なのに。毛布の外は寒かつた。すきま風がヒューヒューなつている。台所の窓に、またつららができているだろう。

両親もまだ眠っている。ふたりの静かな寝息ねいきが聞こえる。母さんは週に一度だけ早起きしないですむこの日を楽しんでいる。日曜だけは、早朝の冷氣にふるえながら工場に出かけなくてもいいのだ。父さんは昨日の夜、帰りが遅かつた。駐屯地ちゅうとんちを訪ねあるき、遅くまで兵士たちと話しあっていたのだ。ふたりのあいだに、ハンスぼうやが寝ている。いまだに具合がよくなないので、両親はハンスぼうやをベッドに寝かせることにしたのだ。これで温かい思いだけはできる。マルタがよくいっている。父さんと母さんのベッドが一番温かい。

ベッドの中で、ゆっくり一日がはじまるのは最高だ。まどろみながら物思いにふけることができる。寒さをひしひしと感じるが、それでも頭に浮かぶのは楽しいことばかりだ。日曜

たいこうせつ。

日、しかも四度目の待降節。^{たいこうせつ} いよいよクリスマス休みがはじまる。これでフェルスターの顔をしばらく見ないですむ。フェルスターのいやがらせをじつとがまんする必要もないのだ。土曜日の最後の授業が終わるチャイムが鳴ったとき、クラスじゅうで歓声があがつた。最後の授業の担当がフレヒジヒ先生でなくフェルスターだったら、クリスマス休みの喜びもあれほどおおっぴらにはできなかつただろう。しかしフレヒジヒ先生自身、休みになるのを喜んでいた。革命がフレヒジヒ先生の思つていたとおりにはならなかつたので、しばらく学校に顔を出さなくてすむのがうれしかつたのだ。

マルタが目を覚まして、ヘレをくすぐつた。

「やめろよ！ まだ寝ていろよ。さもないと、たたくぞ」

もちろん本気でいつたわけではない。ヘレはふざけあいたかつたのだ。マルタもそのことを感じとつて、三つ目の棟とうに住んでいる金髪のリーケから教わつた歌のリフレインを小声で歌いだした。

そうよ、そう。

人生なんてお先真つ暗。

文句と小言ばかり。

でも楽しく生きるのよ。

「なら、楽しく生きてもらおうじゃないか」そうささやいて、ヘレは毛布の中で、マルタのあばら骨をつついた。マルタもつつきかえした。

ふたりはきやあきやあいながら、ベッドの上をころげまわった。そのうちまた寒くなつて、ふたりは毛布の中にもぐりこんだ。

マルタは大喜びだった。

「ねえ、つららをとつてきて」

「自分でとつてこいよ」

「寒いんだもの」

「ぼくは寒くないっていうのか？」

「そうよ」

「いいかげんにしないと、こうするぞ」

ふたたび取つ組み合いがはじまつた。激しく動きまわつたおかげで、かなり体が温まつた。「つららをなめるのは、体によくないんだぞ」肩で息をしながら、ヘレはいった。「体が冷えちゃうじゃないか」

「でも、おいしいわ」マルタがいいかえした。ヘレがなめているのを見たことがあつたのだ。

「おいしくなんかないさ！」

「おいしいわよ！」

またしても、取つ組み合いがはじまつた。ふたりはつつつきあい、くすぐりあつた。とうとう息が切れて、本当に体がほてつた。ヘレは起きあがると、凍えないように服を着た。それから台所に行つて、蛇口の水が出るかどうか確かめた。水は出てこなかつた。水道管はまだ凍つっていた。

マルタも台所にやつてきた。蛇口をちらりと見て、今日も顔を洗わずにすむとわかつたようだ。さつきよりも機嫌きげんがよくなつた。窓辺まどべによりかかつて、ガラスにできた氷の結晶を見つめ、息を吹きかけて結晶に穴をあけると、そこから中庭をながめた。マルタは歌を歌いだした。

降誕祭こうたんさい、降誕祭

あなたを知らないなんて、
なんてまぬけなの。

いつまでもお馬鹿さんでいるがいい。

それはマルタが作つた歌だつた。最近はその歌ばかり歌つてゐる。マルタ自作の歌詞はたいていつまらないものだつたが、ときどき妙におかしいものがあつた。

ヘレは紙と木片もくへんをとつて、かまどの火をおこした。母さんが同僚どうりょうからペーミントティーをもらつて、こここのところ、毎朝そればかりいれて、胃を温めていた。だが父さんが手に入ってきた石炭はそんなに長くはもたない。どこかで新しい石炭か木片を手に入れないと、熱々のペーミントティーをいれることもできなくなるだろう。石炭を借りようにも、シユルテバあさんの手持ちも心細くなつていた。

「なんで雪が降らないのかな?」マルタは毎日、雪を待ちこがれている。雪のないクリスマスなんてありえないと考えてゐるからだ。マルタは、お祈りまでして雪が降るのを待つてゐた。お祈りは、シユルテバあさんから教わつたものだ。だが、いまのところ効き目はない。ヘレもクリスマスが楽しみだつたが、マルタにとつては格別な行事だ。マルタは、特別なプレゼントを期待している。それに、クリスマスはマルタの誕生日でもあつた。明後日あさつて、クリスマスイヴに、マルタは六歳になる。学校にあがる年齢だ。これでシユルテバあさんのところで手伝いをしなくてすむようになる。

「ねえ、去年のクリスマスを覚えてる?」マルタは、窓にできた隙間から目をはなさずにたずねた。

「もちろんだよ」

「どんなだつたつけ? 話して」

「どんなだつたかっていわれてもな。父さんは休暇きゅうかで帰ってきていて、ぼくらは台所で食事をした」

「そして、あたしの誕生日を祝つたのよね!」

「そうだよ」

「あたしの誕生日はどんなだつたつけ?」

実際にはなにも祝つていなかつたが、本当のことはいえなかつた。去年は誕生日を祝つているどころではなかつた。マルタの五つの誕生日は、戦時下で迎える四度目のクリスマスだつた。両親はひと晩じゅう、愚痴ぐちをこぼしてばかりいた。そしてヘレはマルタとばば抜きをして遊んだ。クリスマスといつても、それだけだつた。しかしへれはなつかしそうにいった。

「楽しかつたよ。みんな、大笑いしたつけな」

大笑いするのは、マルタの大のお気に入りだ。

「今度も大笑いしましようね。そしておなかいっぱい食べるの」

ヘレは石炭をひとつ、真っ赤に燃えている木くずと紙の上にのせた。今日はハイナーの家を訪ねることになつていて。クリスマスが間近になつたからだ。マルタは期待に胸をふくらませていたが、ヘレはそれほどでもなかつた。この遠出とおでが物乞ものごいであることを自覚していた。ハイナーの両親はハイナーではない。フリツツの父親を連想させるハイナーの父親に出会つたら、きっと面倒なことになるだろう。息子をよく思つていらないのなら、物乞いに来た息子の友だちをうさんくさく思うにちがいない。

石炭が赤々と燃えはじめた。ヘレはかじかんだ手を火にかざした。前の晩に母さんが念のため、表通り側の棟からもらつてきた水をかまどにかけた。マルタはとなりに立つて、寒さのために赤くなつた鼻をすすつた。

しかしヘレの気持ちはすでに、ハイナースドルフへ行つていた。エデがつきあつてくれるのが、せめてもの慰めなぐさだ。

はじめ、エデは遠出するのをしぶつた。父親の具合がよくなかったのだ。医者の話では、エデの父親はひどい肺炎はいえんにかかつているという。人にうつすことはないが、治る見込みはない。ちゃんと養生すれば、病気を引きずりつつ長生きできるが、無茶むちゃをすれば、病気はさらに重くなり、命に関わるという。そのことを知つてから、エデは父親の世話をするため家を離れないようになつた。だが、たまには新鮮な空気を吸つてきなさい、と母親にいわれたの